

麻生路郎★主宰

SENRYU ZASSI

Published monthly

川柳雜誌

No.3 VOL I

雜感二三

☆老大家と新人

山口縣の久賀町から出てゐる「大島民報」を覗いてゐたら、久米正雄氏等一行「繪と文」行脚に來島といふ記事が目についた。廣鐵と日本交通社で呼びかけられた「新しい觀光地」へ提灯記事をものしに行くのであるが、昨日まで文藝報國會で軍閥の提灯持をジャン／＼やつてゐた久米氏等が今日は懷具合のよさそうな地方民を食ひ物に押しつけて行くのだとしたら、心あるものの苦々しく思はないではあらぬことであらう。

久米正雄氏等が暫間的な賣文の徒であるならば一笑に附していゝ問題かも知れないが、少くとも文學に生命を打込んでゐる人たちであるならば假令

追放令に該當しないまでも多少共謹慎を要する地位にあつたのではなからうか。或は遠慮だとか謹慎だとかしてゐては食へないと云はれるかも知れないが食ふためにはどんなことをしてもいゝとは云へない筈だ。この事は單に文壇人畫壇人だけの問題ではない柳

本誌への希望

顯原 退藏

敗戦國日本を明るくする爲の川柳を育てゝ下さる事を切望します滑稽も諷刺も冷やかでないもの、あたゝかい愛情で包まれたものを望みます。

壇に於てもそれは云ひ得るのである。

軍閥にだまされてゐたとかゐなかつたとかは別としても日本は國を擧げて戦つてゐたのであるから、戦時中に、大なり小なり戦犯的行動をとら

なかつたものはおそろく稀であらう。しかしたとへ欺されて踊らされてゐたとしても、戦後戦犯者と目されるやうな責任のある地位にあつたものは追放令に該當するものではないと拘はらず、自己の人生の有終の美を濟す意味からでも、大いに謹慎し、今後如何に生きるべきかについて、三思も三考もすべきではなからうか。

柳壇に於ても、文藝報國會の一翼を擔ひ、それ等の組織の幹部？に列した人々は、假令甘い汁は吸ひ損つたとしても追放令には該當しなくとも新日本の柳壇建設に際してはジタバタすることだけは遠慮して貰ひたい。將來の柳壇はハツラツたる青年川柳家がそれ等の便乗主義川柳家を排して雄々しく起ちあがるところにのみ可能性があるのであるまいか。敢て一石を投ずる。

★作句と三合配給

或る人は云ふ。「三合にならぬと句が出来ぬ」と。うなづけない言葉ではないが、斯うした言葉を吐く前に、句に對する打込み方の足りないことを反省して見る必要があるのではなからうか。私はさうした人達に霞を吸うて句を吐き給へとは云はないが從來物質的に豊かな人達の方が貧しい人達よりも藝術の門を潜るのに至難であることを思へば三合になれば賣病をかこつらん

(路・郎)

となり、五合も喰べさせればおそろく死んでしまふのではあるまいか。

★刀三の句を憶ふ

秋の夜の編輯室は冷えんとして椅子も何んとなく冷めたい。「蟲泣けば泣くで原稿料になり」と云ふ刀三の句を思ひうかべた。刀三が死んでからも幾年になるかな。いゝ作家だつたが、胸を病んでゐた若い細君を見送つてから彼も又同じ病に斃れたのであつた。「戀の疲れズボンで敷いて寝る」や「地獄へ行くならん死にたくはなし」など次ぎ／＼に彼の句が思ひ出された。近ごろは斯うした自由な而も大膽な表現の作品を見せにくれる作家が居なくなつた淋びしいことである。(路)

不朽洞句抄

麻生路郎

蹄の輪月は遙に忘れられ

新盆へもうなげくまいなげくまい蹄の輪抜けて大阪辯になり題聖德太子の和に如かず一ト握りあゝ人生は像に如かず積上げた俵を撮す寫眞班カメラマン秋草を撮り蟲を撮り搾取されてゐた若き日になつた賣食ひが今日歌舞伎行つたオムレツが囃中華の店と知れ復員のなすことなし秋の暮闇の味知らずに佛樣になり野荒しも子故の闇であつたのか父親の小言は煙草巻きながら買出しが煙管忘れて歸るなり三合になれば胃病をかこつらん警察署救けた方も涙なりマドロスを啜へ赤字の續こと秋日和割木を割つてあげやうか曉語で書をすました顔もせず署長以下代用食で會議なりおからさへ思ふふまゝにはならぬ日よ

劑療治患疾性膿化

錠ルジバルア



續川柳講座

(3)

麻生路郎

女性の句に就て

葎乃の句に

飲んで欲しやめてもほしい酒をつ
と云ふのがあります。

この句は夫が愛飲家でありそれも機嫌酒なので、大いに飲んで欲しいと思ふ半面には若しか酒のためにからだを害されては大變だと云ふ悩みが詠まれてゐて、人妻としての心遣ひがよく出てゐる句であります。

女性の句には、この句の示すやうに、作家の心境や、生活環境を詠んだのが大半を占めて居ります。

次に手近の「川柳雑誌」から女性の句を抜いて、作句上の指針といたしませう。

お歸りにならず刺身も色變はる

(葎乃)

よいお鯛うまい蟹でとおいで行き

(欣女)

文學が好きで裁縫セロばかり

(よし江)

縫ひ上げた布團へ坊の來て轉び

(愛女)

女中部屋覗けばみんな据りかへ

(貴志子)

食慾がなくなる程に味をき

(久枝)

どこで息づくのか母のお念佛

(眞理子)

縁談へ可笑しい程に姉沈み

(洋子)

ボロ傘を男きつちり返しに來

(秋子)

はつきりとした娘若波文庫より

(ユリエ)

日光のほひをさせて子は戻り

(美奈子)

斷ち臺の上で一人の畫がすみ

(夏子)

お返しに休閑茄子で間に合はせ

(公子)

例示した句は何れも作家の

心境や生活環境を巧みに描き

出して居ります。少しく短評

を加えて見ませう。

「お歸りにならず」は「飲ん

で欲し」の句と姉妹句の觀が

あります。これも作家の心境

がよく出て居ります。主婦と

しての折角の心遣ひが刺身の

色變はるで無駄になつたばか

りでなく、心平らかでないこ

ろまで描き出して餘すところ

がありません。しかも、こ

の心の平らかでないのが單な

る待受けや、無駄骨折を意味

するばかりでなく、意識する

と、しないとかいふものはらず、

多少の嫉妬心といふものすら

交じつたムシヤクシヤを感じ

させられるのであります。ま

してこの句からは實感句の如

何に強いものであるかと云ふ

ことをも思はされますと同時に

に、女でなくては詠めない句

だと云ひ得るのであります。

この句などから考えても、女

は女としての句の掴み方や、

觀方や、感じ方があることを

知ることが出來ます。同じ臺

所を詠んだ句でも、次の

「よいお鯛」の句には明るさ

平明さがあります。臺所を詠

んだ句でありながら、世帯染

みた感じがすこしもないので

あります。新婚早々ではない

にしても、人妻の若さ單純さ

を感じさせられ、特に何處に

妙味があるとは云へないが、

何んとなくほほえまされる句

であります。

「文學が好きで」の句は作者

が、まだ女學生であることは

ゼロの二字でハッキリ知悉す

ることが出來ます。句に餘情

はありませんが環境はハッキ

リ描出して居ります。次の

「縫ひ上げた」の句は一寸し

た寫生句であり、軽い穿ちの

句であります。これなどは特

に女でなければ詠めないと云

ふ句ではありませんが、來て

轉びに一寸困つたといふ心と

困まらされることの喜びと云

つた母親らしい愛情が幽かな

がらも感じられるのでありま

す。

「女中部屋」の句はブルジョ

アの主婦らしい觀方の句であ

ります。みんなの三字で一人

や二人の女中でないことが知

れるし、奥さんに思ひがけな

く覗かれたので、バネのゆる

んだ女中達のからだに急に緊

張して握りかえたのでありま

すが、單に握りかえただけで

なく、間食が何かしてゐた女

中は慌てゝ煩張つて目を白黒

させたであらうところのユー

モラスな情景までが眼に浮ん

で來るのであります。まことに

鋭い寫生句であります。

「食慾が」の句は料理に經驗

の浅い女が、味きゝばかしし

てゐるさまを詠んだもので、

必ずしも女でなくとも詠める

句境であります。

「どこで息づくのか」は軽い

スケッチですが、たいていの

ものなら見落すところをうま

く捉えた作者の手腕をたたえ

たいと思ひます。只母が念佛

を稱へてゐるといふだけだの

に何んとなくユーモア味を感じ

させられるのも面白いでは

ありませんか。斯うした餘情

とか餘韻とか云ふものは無理

に作らうとして作れるもので

はありません。作者の天分に

もよりますが多くの叙法の洗

練によつて生じるのでありま

すから不斷の努力に俟つより

外はないのであります。

「縁談へ」も亦寫生の句であ

ります。縁談に對して妹から

觀た姉は斯うもあらうかとう

なづかされます。殊に姉に意

中の人があるとしたらなほ更

のことでありますが、この句

から、意中の人があるとまで

に想像しなくとも、縁談に直

面した女性心理を解剖して見

せてもらつてゐるやうな觀が

いたします。

「ボロ傘を」の句は女性とし

ては珍らしく皮肉な句です。

男の胸へ匕首を突きつけたや

うな鋭どさがあります。惚れ

られてゐるとは云はず、男

をグツと見返へしたところ相

當なものではありません。戀に

かけては愚かな男の心理を剔抉

してあますところがありませ

ん。句の表にはさうしたもの

を少しもあらはさずに、斯く

も適確に片戀の情景を描出し

得た手腕に敬服いたします。

殊に、上五のボロ傘にしても

きつちりにしても男の愚かさ

を點描するに恰好のものであ

ります。

「はつきりと」の句は穿ちら

しくない穿ちの句だと云へま

す。古句の穿ちのやうなあく

どさがなくところ、新味を感じ

させられます。岩波文庫を

輕妙に取扱つて居ります。

「日光の」の句は眞夏の暑さ

にもめげず、日光のほひを

ムームーとさせまツかな顔を

して戸外から戻つたところを

スナツプした句であります。

作者の感愴のよさを見せて居

ります。

「斷ち臺の」の句は作者の環

境がよく出て居ります。夫の

出勤して不在であることもうなづけるし、別に不平とか不満と云ふほどの強いものではないが、何んとなく物足らぬ心を懷いて、一人でそそくさと晝の食事をすましてしまふ女氣を汲みとることが出来る。

「お返しに」の句も作者の環境を詠んだ句であり、穿ち味もあります。お返しを休閑茄子で間に合はすところ、女らしい見つけどころであります。別に奇もありませんが捨て難い句です。

斯うして例示された句に一々メスをあてて見ると何れも女性の心境や環境を巧みに描出してゐることがうなづけます。では、それだけが女性の句境かと申しますと、決してそうではありません。女性の句境も男性と同様でありまして性別によつて句境の廣狹深淺のあらう筈はないのであります。しかし、女性の詠む句にはユーモラスな句が尠ないとは云へますが、

吸取紙ついでに鼻の頭へも

(機見女)

戀の浴衣むつきとやならん

(スエノ)

止めかけてゐたに煙草の御進物

(吟女)

の如き句もあるのであります。皮肉味の句や諷刺句にいたしましても多くないとは云へ

ますが、前掲の「ボロ傘」のやうに痛烈骨を刺すやうな辛辣な句もありますし、

男の子おひやを呉れと父をまね

(松代)

方針を問はれて女給とも云へず

(スエノ)

レントゲンで見ればあはれな御令嬢

(カズエ)

何か云へば身分々々と言ふ夫人

(不路子)

おでんばと知らずやさしい婦人

(縫子)

などの如く、眞綿で首を締めるやうな皮肉や諷刺の句も詠まれてゐるのであります。

殊に、初洗ひ藍の匂ひを追ふ心

(武子)

うつむいて炭ついでに鬚句はせ

(壽枝女)



日ヶ百風史

六月十六日が史風、原計二郎氏の百ヶ日に相當するので川柳不朽洞會の人達を中心に川雜梅田支部の人々や故人の息のかゝつた人達に集つて貰ひ、西宮市の史風居で追悼句會を修した。折悪しく雨となつたが多数参加されたのも全く故人の徳の然らしめるところであらう。

のやうな感覺的な句や虫、ヒヨコ天王寺さんのどか
乙女心に歸る豆の葉 (房子)
のやうな詩情美豊かな句は男性のそれに比して尠ないとは云へないのであります。しかも感傷的な句や浪漫的な句に至つては男性のそれよりも遙かに多いのでありますから一々例示するまでもありますまい。

其他女性の社會觀、人生觀の句には次のやうなものがあります。

上女中下女中との大地主 (日出子)
こつすれば愛せられる主婦の友 (妙子)

鏡々選等を順次披露、最後に路郎主幹の熱辯で故人が特に孝養に篤い人であつたこと、眞に川柳を樂しんでゐられた人であることを知り、感銘を深くした。殊に三令嬢とちか子夫人が作句され夫人の句が天位に抜けたのもゆかいであつた。

故人の柳歴は、大正六年の夏にはじまるやうであるから相當に古い「千兩箱」といふ柳誌を刊行されたこともあつたが、大正十三年七月に「川柳雜誌」の同人に加はり、昭和十一年七月、川柳不朽洞會會員に列し古顔の一人として重きをなしてゐられたが今春三月天壽を薨すに遂に永眠されたのであつた。享年五十一歳。

次に故人の句二三を掲げて其の

ヒヤシシメの音沙汰でなはんのこ
十人に吸はせても赤い唇 (葎乃)
沈黙の何時か分つて戴く氣 (多喜女)
人は皆かく相成れり靈柩車 (静子)
又、お辭儀許りさせて女の子を育て浴槽にすもり立つたはみな我が子 (葎乃)

前にも述べましたやうに、女性には女性としての句の掴み方があり、物の觀方があり、表現の仕方がありますが、それは女性が個性を出し切るところにおのづからさうした結果があらはれるのであつて、女でなければ詠めない句ばかりを創れ、でなければ句にならないものであります。云ふ意味ではないのであります。男性的な作者であれば句も亦おのづから男性化されるからであります。しかし、女性が眞にその個性を生かして作句すれば男性化された表現の中にも何ッ處に女性の匂ひが漂ふてゐるものであります。要は川柳とはこんなものといふ類型的な句を詠まぬやうに留意して欲しいのであります。

句風を偲ぶよとする。
今日までの忠義捨てたお前なり次郎長讀み一人酒をつぎストロブへ女給の方が足をあげ
追悼句會詠草 一幹事記
酒なればこそ疊へも接吻し 武良里
探してゐる父は機械の隅にゐる 緑雨
サービスティ五十圓にて銚子付 幸子
燈明がたえても母は座つて居 三子
機械もさうわつて見た日若 司郎
酒好きの挨拶どうだ飲め 史郎
財布の底はたいて飲め物足 俊郎
お燈明父亡きあとを絶すまい 鮎美

さつまつ著せめて墓でも探る 香林
飲むほどに道説く君であつた 硯
罹災の身洋酒の瓶を愛撫する 光
著づるはラオの智慧で植 翠光
機跡の機械の側の月見草 玲女
赤きびた機械へ學徒涙ぐみ 哲水
科學する心機械を又こわし 光代
麥取りの機械に祖母の顔も見え 吐夢
著づるへ夫婦喧嘩も少し植 柳堂
燈明のゆらぎへ子等は強く立ち 達子
白鹿を少し残して逝きました ちか
づばらな機械だまた動きはじめた 路郎

川柳塔

兵庫縣 岩崎 柳路

今日此の頃は盗泉の水も呑む氣也
何もなく共柳は緑り花は紅
其後を聞けば洋裁してると云ふ女
復興にクレイン、トラツク、サルベージ
胡瓜もみトントントンと夕の風
ふと見れば螢の火なり蚊帳のそと
欠配を平氣で過す暮向き
寝て起きて忘れた程の健忘性
熱演にフラスコ揺れる手の動き
寝て見れば山より高く蝶の舞ふ
ロボットにされて居るのを意識する
ヘンリー松岡戦犯でないと死んでゆき
ペンバンガール弄ばされたとは云はず
留守宅の縁にヘチマが搦みつ
何か放出して呉れそうな渉外部
月並な空想で吾れ宵寝する
安っぽいボレロの踊り見て歸り
妻と竝んで際どい映畫観て觀
手際よく騙されましたとは云へず
誤解だよ女を喰はずどころかい
スクラップゴシップにある俺の記事
リバイ船國敗れても山河あり
蜂に刺れて植木屋お茶に降りて来る
公平にして區別あり形見分け
馬鹿な子息へもつと母親馬鹿になり

大阪市 武部 香林

山陰點描(四句)

トンネルを出てトンネルに入る暑さ
一軒も焼けず田舎に陽の當り
来て見れば見返り物資の桑も伸び
乾瓢の白さ都塵の眼に涼し
戀人と別れ米とも別れたり
速達も電話もあやし尻からげ
踊り娘の股裂けそうに裂けそうに
若後家へ按摩は永がくながくもみ
食ふてをればそれで偉いと見えるなり
働いた働いた女房の足の裏
配給を賣る淋しさを見ておれず
葬式で逢へばお米はおまへんか
戦犯の耳に鋭い日記帳
堅い顔して巡查よ淋しがらすな
ルンペンの愛を見つけた長者の娘

旭川市 宮田 不二

陰膳の人が還つた西瓜割れ
おしやべりの口を封じる蒸しタオル
いつまでも暑いことですモンベ脱ぐ
早いもの又手袋に用が出来
スカートになれば女としての線

大阪市 木下 幽王

天皇を呼捨にする凄じさ
無言の抗議兒はやせ細り
曾ては消耗品だつた復員の僕
ぼろくそに云はれても金の有難味
戦すみぬ何も云へない俺だけど
榮養失調それから軍閥こきおろし
敗戦を知るや知らずや厚化粧
宿命と決めるにむごいことばかり
敗走幾山河疊の目の黒さ



雜筆 春秋

千本の印象(上)

西川 青美

昨年六月五日の空襲で御影町天神山の住宅も全焼した。知人の紹介で姫路の十里奥で姫新線の千本といふ驛近くの或る人の裏二階に開疎した。

空襲を免れる場所としては理想的な農山村で、姫路に原子爆弾が投じられても山深いこの千本には被害はない。毎日毎夜防空室に出たり入ったりした御影の防空生活に比べて千本では寢床を出やうともしない。尖つた神經もやつと圓くなつて來た。

千本は高い山々が南側と北側に屏風のやうに東西に連つて、その山間に僅かな田畑と國道と川と姫新線とを挟んで居る細長い村である。

昔は宿場であつた。舊家が二三軒古臭い土塀を高くめぐらせたり背の高い土壁の倉が残つて居る。雲助が多勢住んで居て賭博と酒に竹杖一本の裸體生活をした者も居つたさうである。宮本武蔵が訪れた「泣き寺」もある。

今は農家も裕福になつて殆どが二三反の小作人でありながら雲助風の悪い氣風も無く、姫路や阪神の文化を取入れて、悪く言へば刺戟を受けて、素朴でもなく、かといふて悪くもしてるとまでいひかず、住みよいとも悪いとも言へない處である。セーターらしきものを着たアンチヤンが草履で歩いたり、更生のランビースを着た女子青年團員がクラブと稱する集會場へ夜間英語講座をききに來たりして居る。

役場、學校、駐在所、お米の配給所が千本の驛から約一里離れて居るのが不便である。醫者は一里半の處に居る。昔の宿場なるが故に驛を此處へ定めたものらしい。地味よくない山ばかりで檜や杉が育たない。その替り全山雜木林だから、薪炭や枯柴を探る事が冬の仕事になつて居る。千本の驛は薪の山になる。松が生えて居ないので松茸のとれないのが山村らしくない。蕨や蓬は乾燥して出荷する程澤山とれる。

春

満山五月の新緑は目に浸みる程強烈な緑を光らせるのに加へて至る處柿の新芽が赤きラ／＼と艶を出して美くしい。時鳥も栗山の八幡社の森に時々鳴く事があるが、山鳩は朝に晩に鳴いて居る。初鰯の味覺は昔の夢であり近き將來の

大牟田市 高田 抱逸

赤蜻蛉今日は日本の一週忌
民主主義坑夫遠うから待つてゐた
蛋の糞つけて千人針歸り
公休が逆に疲れる父となり
棒持つた巡査上海俤ばせる
親方に侵されがちな民主主義
米の値の三千圓を歴史とし

大阪市 水谷 竹莊

看護婦に惜しいと思ふかくし藝
乱れ籠今度はいつとたゞされる
寝てまでも愚痴を云ふなと寝てしまひ
奥様にすまぬ日もある女事務
何んとも言はせて口紅つけてゐる
新婚の夢も醒め行く物價高

奈良縣 尾崎 方正

よしそれが南朝正統だろうとも
うちの娘も嵩高くなつたと搜してゐる
大學に労働學のない日本
大阪市 市場 浚食子
戀ともならず唇さむき候となり
生理休暇映画へ今日はゆくつもり
蒸溜水のやうな女に媚びられる

大阪府 米本 貴志子

敗戦の心に慣れて月を觀し
民主主義民主主義とて垣を越へ
闇屋さん自轉車ビカ／＼光らせて
賣喰を聲もひそめず話し合ひ
千圓の玉露といふを振舞はれ
越境のカボチャ上げます入りません

岡山縣 大森 風來子

妻ひとり鹽の中の物思ひ
だがしかし生きる姿と云ひ給え

吸殻を拾ふ人ありよけてゆく

秋の十字路きれいな嘘を母へつき
満員のこんなところで會話集

大阪府 丸尾 潮花

千圓の時計もおなじ音をたて
子がうてよろしおますと皮肉な眼
住友の令嬢か？歳はまだ十二
心中の名に憧憬はせぬけれど

兵庫縣 西川 青美

復員だ背擦る父子おやこ聴く母娘おや
戦前の勤儉はみな封鎖され
三錢を十倍出さにや切手出ぬ

奈良縣 上田 翠光

米の値よ下れ下れと秋が来る
増配の豫告に闇値うろたへる
腕よりも顔に自信のある師匠

滋賀縣 北川 春巢

復員の蟻も呆れる程背負ひ
上品なスリに古本屋でやられ
よい雨ですと疎開者の如才なし
いなごとは云はず天ぶら客へ出し
芋腹などゝうちの子ませたこと

○

金澤市 安川 久留美

ひとり言いふても米はふえぬ也
秋風のま表に立ついゝ女
教會の鐘炎天を思はせる
累代の墓青柿が落ちました
驛へ來て見ると苦惱は少し消え

大阪府 橋本 綠雨

袴を脱いで相談もちかける
お世辞等どうでもよいと膝をくみ

榮しみとして千本の小溝には芥が
至る處でとれる。時鳥が鳴いたら
食べるなど言はれて居る。野生の
落も至る處にある。

全山紅葉したるさぞ／＼と思つ
て居たら茶色にしほむだけだった
美しいのはむむる早春である。
櫻や桜、櫻や栗等々、赤、紅、淡
緑、黄、淺黄等の若芽若葉が競ふ
て芽をふく處へ逆光線の夕陽が山
端にかゝる時は紅葉の時の淋しい
美しくさでなく潑刺たる美くしき
がある。

斜陽あり紅葉より美しい若葉山 青美

一反足らずの畑が家を建てる
約束でやつと貸して貰つた。節の
多い材木ながら我が家が出来てか
ら家内や娘は落付いた安らかな氣
持が出来た。耕した後で椽側に
腰をかけ、春の陽射しを満喫して
飲む無糖紅茶は又格別である。
牛乳の分けて貰へる時はサツカリ
ンを加へて濃いミルク紅茶を造る
三宮の開市ではいくら取るだろう
等と話す。鶏もよく卵を生んでく
れる。兎は太る。家鴨の雛は目に
見えて毎日大きくなる。灌水用の
溜池を喜んで居る。

家鴨遊ぶ一枚脱いで鉄を持つ 青美

馬鈴薯には落葉をふんだんにや
つた。凍てぬやうに種薯の上にも
かけてやる。一月頃メカゴ背負つ
て採つて來た落葉がお役に立つた

僕とこの若菜

武部 香林

ミス・ワカナが死んだ。亡くな
つて見ると、僕とこの若菜は、し
きりに惜しがった。川柳會で、

自分の句が讀み上げられた時

「若菜」と名前を云うのがきまり
悪くて、つい聲が小さくならざる
を得なかつた。賣り出しのワカナ
を、眞似たと思われそうで、「私の
方が先輩ですよ」と、折あちは言
ひ譯をしてゐた。

大正五年に附けた雅號で娘の頃
大正川柳で井上創花坊、麻生路郎
先生に入選させて貰つたなつかし
い雅號を、今さら變えるに忍びな
いので「困るわ／＼」とよく言つ
て來たが、新聞でワカナが急死し
た報を讀み、本名川本キクノ年三
十六才に、改めて因縁の不可思議
を覺えた。本家の若菜も本名貴久
與、年は違ふが同じ亥年。「私も心
麻痺で死んだらねえ」と淋しげ
に云ふ。

笑ひ聲残してワカナ一人旅

品質優良

ペン先・針ピン・ゼムクリツプ

立川ペン先製作所

上野市



川柳葡萄句會 の概況と詠草

日時、八月廿五日の十時から十七時まで
— 会場は大和の平群村正光寺、川柳ハワイ
支部同人、本會會員前山北海氏を迎えて川
柳不朽會の川柳葡萄句會を華々しく開催
歡を同じくしたもので、路郎先生と北海、普
天、白面人、綠雨、翠光、艸樂、鋭々、香
林、葉、竹莊、一笑の諸氏とサービス係の
霞乃、一步

會員一同、房々とした葡萄の試食をしな
がら談話と句作に耽り、晝食の珍味に酒盃
を手にしてから、興趣は更に倍加された。
次いで路郎先生から、本日お招きした魔花
麗氏、柳路氏不参の報告があり、北海氏を
圍む座談の後、選句が披露された
北海氏の談話はハワイ柳人の消息からは
じまり、會員の質問と共にいろいろの話題
に移つて行き、興味一〇〇パーセントのも
のであつた。時に教へられ、時に羨望にた
えぬものがあつた。左にその一端を紹介し
ておく。

ホノルルに於て一九四一年十一月開催の

句會が戦前最後のものとなりました。

ハワイ柳人では古川風竹氏（川柳布哇支
部幹事、魔花麗氏の令兄）が病臥されたの
と、長谷川猿吉氏が戦時中に病歿された以
外全會員無事でした。布哇柳人は「川柳雜
誌」に投句することを楽しんで、ハワイの
ローカルカラーを現はした句を送ることに
夢中でありました。
長谷川猿吉氏は熱心な柳人でしたが、長
男と次男を米軍に捧げ、長男はイタリアで
戦傷、左足を切断せられ、次男は無事歸還
されました。私（北海氏）の息子も歐洲第
二戦線に参加しました。

ハワイの各人種は幼稚園から机を並べて
學びますので、習慣が一定しますから各國
人が互ひに白眼視するやうなことはありません。
米國で生れた人間は全部米國人だと
されてゐます。これ等種多な人種がみな仲
よく暮らしてゐるのが米國特にハワイの誇
りと見られてゐました。日本人も永住の地
ハワイとして家を構へ周圍に果樹等を植ゑ
精神的にも落ちついて楽しい生活をしてゐ
ました。二十年以來、土地を求めて布哇を
自分の土地と考へるやうになり、ハワイに
住の日本人は夢にも日米戦争が起るなどと
は考へてゐませんでした。

ハワイは島國ですから開戦當初物資封鎖
の噂に先づ日系市民は米を買込みました。
二世は米を必要とせませんが、親達は二重
生活で日に一度は米が必要だったので常に
三俵位は所有していました。その他味噌、醬油
から豆腐、蒲鉾までありました。これ等は
終戦まで豊富でした。配給されたものはガ
ソリン、タイヤ、酒類でした。酒の配給量
は一週にウキスキー小樽一本、酒は二升、
ビールは二打、女性には二十一歳以上参政
権者には男子と同量が當りますから娘を持
つ親爺連酒に不自由なりました。日本酒は
戦前ハワイでも醸造されてゐた（7頁へ）

兼題「笑」 路郎 選

いゝなずけ顔をかくしてよく笑ひ
寫眞班笑つたところを所望する
お客さんに笑つて貰ふいゝ稼業
こゝで笑はすことになつてゐる講義
笑顔さへ見せぬ夫へ氣がつかれ
華やかな笑ひ應接まできこえ
ジブからハロー〜と笑ひ返し
爆笑がストープの方で又起り
五シ合の酒が笑ひも配給し
久しぶり笑へば君のかほになり
叱られても笑つて居れる仲となり
姑がたまに笑へばサタンめき
狂人が笑ひ學者も笑ひ出し
喰べ足らぬ同士淋びしく眼で笑ひ

兼題「握手」 北海 選

握手して敵だつた掌のあたゝかみ
ジブまで見送り握手して別れ
ベッドから握手の指は細かりき
誰もみてへん握手して別れよう
握手の手、雑巾がけの手と見え
感激の握手、両手で握りしめ
汽車の窓離さぬ握手とがめられ
葡萄ふさ〜再會の握手する
ギョチない握手スターも少しだけ
あつさり握手をされて物足らず

兼題「友情」 綠雨 選

歸還して友情の姿見なほされ
今日も又友情になく手紙が來
友情が諸となつたになつて來る
友情は壕、舍もさがし當てくれ
一升の米で友情見せてやり
友情はづけ〜言ふてくれるなり
友情の嘘へ夫人は腹をたて
友情は脊中を一つどやしつけ
友情のうれしき手紙はなすまい

兼題「發展」 普天 選

發展へひやりと預金封鎖なり
發展の證據寄附でもトップ切る
十週年記念廣間の金屏風
發展へ妻の氣持がついて來ず
別館を建てましつゝ眞盛り
發展と見えてタイアの手紙が來
發展と云はずに闇の儲け高
とやかくのうはさ〜工場又擴げ
ます〜御發展なさおだて、無心狀
發展を淋しきものに母思ひ
水呑も一萬圓と云ふ牛を持ち

席題「差向ひ」 艸樂 選

差し向ひになると女の眼が笑ひ
ほんのりとやぐてもみせた差向ひ
差し向ひ亭主ばつ〜粉を引き
差し向ひやりくりつきた顔となり
差し向ひ仲人許りやきもきし
差し向ひ箸がすこししゆがんでる
差し向ひ話すは色の事でなし
出來すぎた燭〜二人のきればなし
差し向ひニュース静かに聞いて居り
氣苦勞は酒が廻らぬ差し向ひ

席題「腫物」 鋭々 選

腫れ物へ又まじなひを教えに來
えらいとこ〜腫物が出來た十八九
腫物のどうも今夜は寝さぬ氣
缺勤のわけ腫れものをみせて去に
親の手を遠く腫れ物見せるなり

頭腦覺醒劑

ゼドリン錠

疲勞感除去、心氣昂揚
作業能増進、睡氣防止



大阪市道徳町武田藥品工業株式會社

近作柳樽

下手な大工に千圓をしてやられ 徳島縣 夕鐘
 芋餅でちや／＼されて山林を買ひ 同 同
 火を借りる方も民製たばこなり 同 同
 長春で賣喰ひしてた肥りやう 同 同
 金齒ちら／＼見え透いた嘘やう 京都府 春涉
 百圓は大金だつた一ト昔 同 同
 賣る人の身になりますと古着商 同 同
 手荷物やうに英靈扱はれ 同 同
 夕焼の中のわが家へ歸りけり 同 同
 この本が百圓ですと放り出し 同 同
 ねてる間に第二封鎖とやらが出来 同 同
 米びつへかちつてあつた柿三つ 大阪府 鳩花
 かくす事なくさぬ事をこはくなり 神戸市 凡太郎
 怒のない返事に親は氣も使ひ 同 同
 配給を待つて覺悟はできてゐる 同 同
 風鈴のヒステリックな夢の國 伊豫 雨阿彌
 山に食ひ闇値も知らず老いて行き 香川縣 迷觀子
 山に食ひ闇値も知らず老いて行き 山口縣 柳慶
 端然と汽車で看護婦本を読み 同 同
 破産した邸にも似たり日本地圖 愛媛縣 水鏡
 受付嬢むしパンも焼き茶も沸し 西宮市 俊郎
 ゼネストを唯騒げやと解したか 大阪市 博
 焼き飯ですます自炊の日が續き 同 同
 落書きの横文字白く夕闇に 同 同
 吏道刷新給料上げるだけの事 同 同
 ちや／＼な洋装減つて秋深し 同 同
 看板屋エヌをうつかり逆にかき 同 同
 看板のスペルの違ひ子が見つけ 同 同
 番頭と主人が並ぶ露天街 同 同
 同權などと明るく妻笑ふ 同 同
 申譯だけにと疎開先の寄附 岐阜市 周峰

決議文意義忘れて云ひつものり 決意文意義忘れて云ひつものり 大阪府 恒良
 ラッシュアワー千切れた鼻緒裏返り 同 同
 靴箱に捨てられる迄齒を磨き 同 同
 配當は現物でする製塩所 鳥取縣 悟志
 一割は黒土も賣る諸の嵩 同 同
 食ひ延ばす工面は鶏の餌にひゞき 同 同
 御時勢は生理休暇をあからさま 同 同
 配給へ生きたる權利の人だから 同 同
 脱税をして賣名の寄附行爲 同 同
 薄儀氏證人台に立つ 同 同
 證人は死人に口のない強み 同 同
 闇値天井を打つ 同 同
 腦天の錐にジタバタする鰻 同 同
 嘘言ふな五百圓ではやれん筈 大阪府 千舟
 退院の朝看護婦の戀を知り 同 同
 叔父急死 同 同
 メチールの壘がまだある一ト七日 同 同
 待ちかゝるのにライターふつと消し 奈良縣 品平
 御不自由はなされてしまひ持つてくる 同 同
 いものこから女房煙草にからんでき 同 同
 女性解放ペンペン草屋根にうそく 岡山縣 よしえ
 平和村封建の煙消え失せず 同 同
 復員の日へ仲人が指を折り 岡山縣 齋藤柊
 露の徑間の自轉車すれ違ひ 同 同
 買出しはもう餅米を契約し 大阪市 牛歩
 妹さんですかとはい僕の失策 兵庫縣 山
 新築の台所まで見せられる 同 同
 負け将棋豫算の立たぬ玉手をし 和歌山 敏一
 悠々とビール飲みつゝ逝つたき 同 同
 波止場の灯海争議とは別に風ぎ 同 同
 立話蹲んでも食ふことばかり 同 同
 約束の朝はこまかい雨が降り 兵庫縣 沙智子
 退職の當座ポストへよく通ひ 同 同

(6頁から)した。日本人街へ来る
 アメリカ人は日本酒をジャパニ
 ズワインと稱して愛好し箸を使つ
 て刺身を喰べたものです、云々。

談も興もなかに盡きなかつ
 たが次いで本會の協議事項に移り
 主たるものは、戸倉普天氏の理事
 長辭任の承認と、満場一致で中島
 生々庵博士を新理事長に推薦普天
 氏を相談役に推薦後、路郎先生か
 ら本日蔭の舞につとめられた竹莊
 氏の勞に謝意を表され、會場を提
 供せられた深井凡々氏を一同に紹
 介、斯くて一同白面人氏のカメラ
 におさまり、楽しい一日の幕が閉
 ぢられた。(香林・一笑記)

當日白面人氏から銘酒とメロン
 翠光氏から銘茶の御寄贈があつ
 た。深謝。

川柳不朽洞會だより

▼多年本會理事長として盡瘁され
 た戸倉普天氏は今春、日東紡産業
 の専務取締役を辭され郷里丹波に
 歸省されると同時に本會理事長を
 も辭任したい旨申出でられてゐた
 ので、八月廿五日の川柳不朽洞會

に附議、辭任を承認することゝ
 なつたが今後とも相談役として御盡
 力を願ふことゝなつた。なほ後任
 理事長は衆望を擔つて中島生々庵
 博士が就任されることゝなつた▼

米本貴志子氏特別會員に▼米本儀
 助氏事業多端のため退會▼十月廿
 七日に川柳不朽洞會有志によつて
 川柳茸狩會を北攝多田神社附近
 で開催し明朗生活への導火線をつ
 くることゝなつた幹事は白面人、
 香林、翠光の三氏。

添削と批評

本誌では初學者に純正川柳を指導
 する目的で左記選者に依頼し通信
 に依り批評添削の勞を執ることゝ
 した。利用をおすすめる

規
 選者
 西田 生乃先生
 市田 榮先生
 米本 貴志子先生
 武部 香林先生

▼添削批評の希望者は本誌の直接
 購讀者であること▼句数は一人一
 回五句以内のこと▼選者の振當は
 お任せを願ふ▼返信用封筒に宛書
 し返信の郵券を貼附、なるべく手
 數をかけないこと▼會費は一回参
 圓▼句稿は川柳雑誌社サビス部
 添削と批評係宛のこと

ハイキング

赤目・香落溪
 岩湧山
 二上岩屋
 のりば 上六
 のりば 難波
 のりば アベノ橋

近畿日本鐵道



P ★ P

▼好評に次ぐに好評で編輯部は張切つてゐる。體形が整つたら次ぎに來るものは云ふまでもないが、今はそれを明言せず必す期待にそむかないことを誓つておく。▼京大の眞原退藏先生から「本誌への希望」が届いた。これは本誌への希望であると同時に、柳友諸氏への希望である。時代が川柳の上に最も雄辯に反映するものとすれば遽にあたゝかい愛情で句まれた句ばかりにはならないであらうが、我等もそうありたいと願つてゐるので柳友諸氏の協力がのぞましい▼本誌の「續川柳講座」は路郎が心血を濺いで執筆してゐるだけに親切で平明で指導雑誌の名にそむかないものとして各方面から推奨されてゐるが、我が社では更に選者數氏に依頼して通信に據る添削と批評の便を圖ることとした。御利用を請ふ。▼澤田四郎作博士（元軍醫大尉）が無事で間島俘虜收容所からウラジオの病院へ行かれたことが判明した▼北川春葉氏は勤務先の鐵道病院内に文藝部が出来たので部長を擔當された岩崎水虹氏も復員されたので近く

句會を開く由▼西川菊美氏は西貢から復員された令息一行君のマラリヤ再發で、御心配の由一日も早く快癒を祈る▼菊澤小松園氏は八月廿三日五人目にはじめて長男を儲けられた「おくれればせながらにやつと鯉帳」の句を作つて大ニコニコ、京都府下健康村に疎開中の傑作なので健一と命名された▼戸倉普天氏は神經痛で臥臥されてゐたが十月に入つて床拂ひをされた▼夷一笑氏は奈良縣を引揚げ郷里姫路市東雲町四へ歸られた▼岩崎

清談に・商談に

喫茶 みどり

ハイキング日和

みどりではせ

上六交叉點西北角

機關誌の川柳を小生が見てゐるものですから一に参り川柳のために大いに語り且つ説きました」云々▼古川麗花麗氏は布哇タイムスに中京だよりを寄せてゐられたが最近大阪へ移られた▼吉田水車氏は麗花麗氏が名古屋在勤中訪問歡談せられた由▼石原伯峯氏（廣島）が復員されたので、土農夫、露斗氏等と川雜廣島支部の再興に盡力されてゐる▼小山晶二氏は京都で罹災七尾市府中町一五一へ移居▼酒井駒人氏（東京都）九月廿八日九十九里濱附近の三城一家で句會を開かれた▼青木克容氏（大阪府）の嚴父が九月五日に永眠された由謹悼。▼庄万よし氏は黨大會の終了後房州海岸で一日靜養され鯛の群生息を見物され▼塚越正光氏（東京都）は臺灣から無事引揚、朝日新聞社目黒寮に勤務されてゐる▼後藤田凡生氏（大阪）は十月十四日に長男克彦君を挙げられた▼大井正夫氏が滿洲から歸られ紋太、奇智朗兩氏の案内で凡々居を訪ねられた由▼蛭子省二氏（愛媛縣）から「假住ひ氏子となつて猪口をなめ」と云ふ句信があつた▼川上日車氏は滋賀縣蒲生郡八幡町字中村江南善五郎様方へ移られた▼渡邊曉童氏は除隊後伊豫越智郡津倉村で開墾に汗を流してゐる由▼本社の川柳忌は九月廿三日午後一時から住吉大社新館で開催▼千石文化部川柳會（府下）は路郎主幹出席の下に九月廿八日開催▼石川縣川柳文化協會、石川新聞社主催で北陸川柳大會が十月二十日正午から金澤市の市立圖書館で開かれる▼すげ笠川柳社（愛知縣）では十月二十日犬山町に於て全國川柳大會を開催される由、路郎主幹も招請されてゐるの

結核

創期的新治療劑

ネオハツモン

コメット

黒田製藥株式會社

戸倉普天著・麻生路郎序

普天隨筆

川柳人の隨筆の面白さは又別である。この場合の面白さは滑稽といふ意味ではない。辛辣に近い觀察の鋭さの謂である。著者は日東紡産業の専務（賞費三〇圓送料二圓半で頒つ

川柳雜誌

「川柳雜誌」の再刊舊號

定價一部三圓送料三十錢

大正十三年本誌創刊以來のバックナンバー（但し欠號あり）

菊倍時代一部五圓三〇送料共菊倍、四六倍時代一部三圓三〇送料共

新川柳評釋（賣切）

御注文はすべて小爲替のこと

大阪市住吉區萬代西五ノ二五

發賣所 川柳雜誌社出版部

B列5號 毎月一回一日發行

川柳雜誌

第一卷 第三號

一冊 金三圓

（送料三十錢）

一ヶ年十二冊 金三十六圓

（送料三圓六十錢）

昭和廿一年九月廿五日印刷

昭和廿一年十月一日發行

大阪市住吉區萬代西五ノ二五

編輯後援 麻生 幸二 郎

發行所 川柳雜誌社

大阪市住吉區萬代西五ノ二五

振替口座大阪七五〇五〇